

「九州大学百年の宝物」余話

山根, 泰志
九州大学附属図書館資料整備室図書目録係

<https://hdl.handle.net/2324/19630>

出版情報：貴重文物講習会. 42, 2011-03-18. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

附属図書館創設期—長壽吉館長と「竹帛会」—

1. 附属図書館における戦前と戦後の違い

1) 目録カードの記述

戦前の目録カードは印記や書入れ等の情報を詳細に記録し、蔵書印から旧蔵者を特定するなど、戦後の目録カードに比べて情報が豊富。

2) メモ用紙

戦前に受入れた和漢古書の中に、「KYUSHU IMPERIAL UNIVERSITY LIBRARY/MEMO」と印字された帝国大学時代の附属図書館のメモ用紙が挟まっていることがあり、それには書誌学的に重要な情報が記録されていることがある。

3) 文庫の収集・管理・認識のありかた

特殊文庫を受入れても、一括して排架されることは少なく、ほとんどが混排であり、しかも部局・学科をまたいで必要な研究室に分け取りされる場合が多かった（特に洋書の場合）。そのように部局を跨いでバラバラに排架されたシュツンプ・バルト・グロース・ロートマール等の舶来の文庫は、『九州帝国大学要覧』『九州帝国大学附属図書館閲覧案内』等では所蔵文庫の筆頭にあげられているが、1949年頃作成された「文庫調査書」には記載されていない。他にも、戦前期には存在を認識されていた文庫が、戦後には忘れられたものは極めて多い。

※別紙「戦前期受入文庫一覧変遷表」参照

4) 展示会の規模・内容

戦前は県立図書館や新聞社、地域の蔵書家と連携して大規模な展覧会をしばしば開催していた。展示する資料の数も種類も内容も豊富であり、図書館員が所蔵資料を十分に把握していたことを窺わせるが、戦後の開学記念展示のほとんどは規模が小さく、展示する資料も極めて限られている。

※別紙「戦前期展覧一覧」及び「これまでの展示会テーマ一覧」（『九州大学附属図書館要覧』2005/2006）参照

→戦前の附属図書館にはどんな人がいて、どのように蔵書を収集し、管理し、紹介していたのか？

2. 創設期の図書館人たち

・長壽吉(1880-1971)

西洋史家。日田出身の書家・漢学者長三洲の長男。号は岫雪。東京帝国大学文科大学史学科卒業後、奈良女子高等師範学校教授、学習院教授、九州帝国大学法文学部教授、上智大学教授等を歴任。その間奈良女子高等師範学校初代図書館主幹、ドイツバイエルン王立図書館、京都帝国大学司書官もつとめ、九州帝国大学では第二代附属図書館長となり、附属図書館の基礎をつくった。著に『史学概論』『西洋近世史』など。

・竹林熊彦(1888-1960)

陸軍軍人竹林卓爾の三男として千葉県国府台に生まれる。本籍地は福岡県豊津。同志社専門学校文科学科、京都帝国大学文学部史学科西洋史卒。ハワイ・ホノルルにて記者をつとめたのち、京都帝国大学嘱託となり、その間国史の内田銀蔵や図書館長新村出に師事した。同志社大学予科教授等をつとめた後、1925年九州帝国大学司書官となり、長年に渡り歴代館長を支えた。青年図書館員連盟に参加し、

図書館関係の論文を多数執筆。1939年京都帝国大学司書官に転じ、退官後は関西地区の各大学の講師等をつとめた。著に『近世日本文庫史』等。その蔵書は、同志社大学図書館に竹林文庫として所蔵されている。

・田中鉄三(1890-?)

岐阜県大垣出身。京都府立第一中学校を卒業後、京都帝国大学附属図書館図書整理係等をつとめた後、1926年九州帝国大学附属図書館司書となった。松濤文庫の整理等に従事した後、1929年に法文学部助手(哲学)を兼任し、竹林とともに総合目録の編纂に尽力した。傍ら豊田實の資料収集や『日本英学書仮目録』(筑紫文庫所収)の編纂に協力した。1934年附属図書館事務主任となり、近藤文庫・西田文庫の受入に携わった。福岡日日新聞社で開催された「全国図書祭記念大展示会」では松浦書店の松浦盛雄の展覧目録編集に協力し、松浦と奔走して「竹帛会」を結成した。勤皇の士加藤司書の顕彰にも関わる。1939年九大を退官し、京都の陽明文庫主事に転じた。

※3人の京都帝国大学在職期間

長・・・司書官 1915.1～1919.11

竹林・・・附属図書館嘱託 1916.9～1925.3

田中・・・附属図書館図書整理係 1911.10～1913.9

文科大学雇 1913.9～1919.11

助手兼書記 1922.6～1926.9

→長壽吉が附属図書館長になるにあたり、同じ京大で勤務していた竹林と田中を九大に呼んだことが想定される。なお、竹林と田中はともに青年図書館員連盟に参加。

・小原克巳(1898-?)

福岡市出身。中学修猷館卒業後、福岡県立図書館につとめた。1925年九州帝国大学司書となり、数多くの和漢古書の整理に従事した。1939年法文学部助手に転じ、『日本地方誌目録』や「日本英学筑紫文庫目録」(豊田實『日本英学史の研究』新訂版、千城書房、1963所収)の編纂や『文学研究』の編集に従事した。また、居泉・三冬と号して俳人としても活躍し、俳誌『鴻臚』を編集した。その蔵書は福岡県立図書館に寄贈されており、その中には今の九大には残っていない『近藤文庫書名目録』の原本も含まれている。

3. 創設期の課題

1) 建物の問題

当初の理想的設計は予算削減で全面的に縮小された。

- ・湿気が多い
- ・書棚が移動できない
- ・無駄な空間が多く、図書の収容能力が少ない
- ・事務室が小さい
- ・便所がない

→裏に事務室増築→閲覧室と事務室との間に書庫があるという例を見ないびつな構造→正門側を入口にするという北面図書館南面転向計画をたてるが大講堂の建築計画が流れて頓挫。

2) 総合図書館構想

文部省の方針として学内に分散した図書室を本館に総合すべきという注文があった。

附属図書館より先に設置された医学部・工学部・農学部は各部局や教室で図書を管理していた。

→医学部の各教室の本を統合することは不可能であり、法文学部でも各研究室に本を置くことになったので頓挫。総合目録の作成に注力することになる。

※東北帝国大学は図書館中心主義で、研究室への貸出には制限がある

3) 図書館に本がない

「貧弱極る図書館の内容 書籍は図書館よりも研究室に多い」(『九大新聞』3、1927)

「九大附属図書館の蔵書は七十万冊であり、その中洋書が十四万冊である。しかし全蔵書の中僅か二割の十四万冊が図書館にあるのみで八割は各学部の研究室にある。ところがこの研究室は大抵学生の出入を禁止しているので、学生は二割の蔵書に群がっていることになる」(『九大新聞』270、1948)

→よく使う本ほど研究室にあり、附属図書館(中央図書館)は貧弱で不要になった本ばかりがあるという現在の状況は、創設当初から始まっていた。そうした状況を打開する上でも、大規模な文庫の受入は急務であった。

4. 創設期の蔵書収集

1) 廣瀬文庫の寄託

開館当時の長壽吉館長のコメント

「此九大図書館は現在三万巻の蔵書があり、殊に貝原益軒の書牘を始め貴重な珍書も少なくないがまた逸も京大や東大の図書館などに比較すると貧弱を免かれぬ・・・**此図書館は九大の学生教官が研究する所だが総長の許可を得れば中学高等学校などの教官諸君など閲覧が許される筈である、尚ほ西洋にもある様に一般蔵書家が貴重な図書を自家に保存されるよりもこんな耐震耐火の図書館であるから、其蔵書を本館に保管を委託されることは特に希望する処でさうすると其図書は本館で丁重に保管するで計でなく同時に研究者に非常な利便を与ふる事となるのである**」(『福岡日日新聞』1925.6.26)

同年9月9日の記事にも「九大図書館門戸開放」が謳われる。

→一般への公開を蔵書寄託の呼び水にした。実際どこまで公開されていたかは不明。

※京大図書館は開設時に発送した図書寄贈依頼状に市民公開予告を附記し、結果大量の図書が寄贈された

廣瀬文庫寄託時の長壽吉館長のコメント

「廣瀬文庫の内容は図書が極めて広汎に亘り殆ど經史子集の全部に及んで居るがこんな貴重な図書を最近誰にも閲覧せしめないで束ねて蔵つて居たのは惜しい事であつたが今度全部本館に保管する事となつたので本館では非常に有り難いと思つて居る此図書中には通俗的な者もあるが大体に専門の者が多いので九大図書館の研究者には非常の利便を与へる事と思ふ。御覧の通り建物が全部絶対耐震耐火の建築になつて居て充分安全を保証し得る者であるし曝書其他に就ても本館は責任を以て之に当る筈であるから本館に寄託されるれば木造の普通家屋に蔵せられるやうな不安は絶対にない事であるが創立早々かう蔵書家の寄託書が増すことは大変喜ばしい事で御蔭で研究上の利便を得る事が多いので深く感謝して居る次第である。どうか各方面に亘り貴重な図書を秘蔵せられて居る方々は之を公開して研究を援助する意味に於て保管を本館に寄託せられる事を切望する次第です」(『福岡日日新聞』

1925.12.23)

図書の安全の保証と研究への寄与を強調することで寄託を呼びかけ。なお、長は2年前の関東大震災で咸宜園先賢の自筆稿本・手沢本を含む蔵書が丸焼けになっており、当時の蔵書家の災害への危機意識を痛いほどわかっていた。

2) 熊本舒文堂における選書

日間瑣細 (三) 蔵書沽却 (『九州大学新聞』26、1929、後『東西南北人』に所収)

「先年熊本にて得た古書の中に「曲亭蔵書」の印のあるのがあつた。書物は経籍の何かで、別に珍しいものでもなかつたが、この曲亭蔵書の印が面白く、学校の図書館に求めて置いた」

附属図書館の『退転者履歴書』に記載された長壽吉の履歴の大正15(1926)年6月23日の項に「熊本市へ出張ヲ命ス(事務取調)期間三日」とあり、『図書原簿』によれば、1926年7月24日に河島豊太郎(熊本の古書店舒文堂)より71部311冊の和漢古書を附属図書館が購入している。その中の後藤点五経(『春秋』は除く)に曲亭馬琴の蔵書印(「瀧澤文庫」「曲亭文庫」「著作堂圖書記」)が捺されており、「先年熊本にて得た古書」とはこの舒文堂より購入した和漢古書であることがわかる。

国史関係の写本や絵図の類を中心とし、戦前の展示会ではしばしば出品されている貴重な資料も多い。長が附属図書館に必要な和漢古書をかなり意図的に選定したことが窺える。熊本藩校時習館をはじめ、膨大な古記録を残したことで知られる宮村典太(1836-1918)や明治初期の熊本歌壇の巨匠小山多乎理(1816-1896)の旧蔵書が多く含まれ、郷土資料としての価値も高い。洋書のみならず、和漢書にも造詣が深かった長の鑑識眼を示すものである。

3) 音無文庫の受入

寺尾新「寺尾壽」(『父乃書齋』)

「大正十二年、父が歿した後、九州帝大の図書館長が、態々伊東へ来られ、父の蔵書を、詳細に点検して行かれ、是非、新設の法文学部のために譲り受けたいとの懇望だつたので、「図書館などに一纏めにしておきたい。あれだけあれば、国語国文学の研究は一通り出来るから」との父の遺志通りに「音無文庫」と銘を打った和漢書は、そつくりそのまま九州帝大へ納つたのである。国文学者にならうとして、若い修業時代にはその機会を得ず、この方面なら、頭角をあらはすことが出来たらうに、と、いつも残念がつてゐたが、今や、せめて幾分にも若い研究者に便宜を与へることが出来たことに、蔭ながら満足して貰へるかと思ふ」

『退転者履歴書』に記載された長壽吉の履歴の昭和2(1927)年4月22日の項に「静岡県伊東町並ニ東京市へ出張ヲ命ス 期間七日(事務取調ノタメ)」とあり、「九州帝大の図書館長」とは長壽吉であることがわかる。寺尾家と親戚にあたる法文学部中島慎一教授の斡旋と長の熱意により受入が実現した。ただ、金策にはかなり苦労したらしく(『九州大学新聞』12、1928)、実際に購入手続が完了するのは長が伊東を訪問してから1年以上先である。

5. 「竹帛会」の活動と「創設期」の終焉

1) 全国図書祭記念大展覧会

日付：1934年11月2日～5日

場所：福岡日日新聞社大講堂

主催：福岡県書籍雑誌商組合 福岡日日新聞社

後援：九州帝国大学図書館 福岡県立図書館

古版本、浮世絵、絵入本、国漢文学書多数展覧し、目録を刊行頒布した。6日には図書座談会が開催された。松浦書店主の松浦盛雄が司書田中鉄三の指導を得て展覧目録を編纂した。

・出品者と出品点数

【九大関係】・・・245点

九州帝国大学附属図書館（186）・法文学部英文学教授豊田實（筑紫文庫旧蔵者）（20）・法文学部国文学教授春日政治（13）・工学部教授桑木或雄（桑木文庫収集者）（12）・農学部教授小出満二（西欧農学古典文庫小出文庫旧蔵者）（5）・九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科教室（4）・司書田中鉄三（3）・法文学部支那学教授楠本正継（2）

【それ以外】・・・110点

医師相浦眞三（26）・福岡県立図書館（14）・郷土史家許斐友次郎（13）・福岡高等学校教授田村専一郎（支子文庫旧蔵者）（11）・北西靄太郎（9）・福岡高等学校教授安田喜代門（8）・東長寺（5）・大山忠平（4）・郷土史家筑紫頼定（3）・郷土史家伊東尾四郎（2）・朝鮮学者前間恭作（在山楼文庫旧蔵者）（2）・荒物商奥村利助（2）・郷土史家林大壽（2）・坂井親治（2）・医師戸上駒之助（1）・福岡日日新聞社斎田耕陽（1）・松本勝次郎（1）・目黒廣記（1）・岩瀬謹次郎（1）・伊藤金次郎（1）・奥村正人（1）・全体の約7割が九大及びその関係者からの出品。九大図書館が関係した図書展示会では最大規模。支子文庫の『大和物語』も出品されており、後に九大図書館の所蔵に帰す本も多数展示されている。

2)「竹帛会」結成

・文学部朝鮮史研究室所蔵在山楼文庫（前間恭作旧蔵）「竹帛会」関係資料（文学部白井順先生のご教示による）

1935年7月8日橋口町風沙屋にて田中鉄三と松浦盛雄が世話人となって「書物同好者の相談并ニ懇談会」開催

「竹帛会趣旨

書物に親しむといふ事、書物を愛して行くといふ事この普及の程度は取も直さず一般文化の向上、将又国民の持つ高尚な趣味性の標準を物語るものであると思ひます、趣味的であると同時に学問的な書物を中心とした会が当地に出現しなかつたのは寧ろ不思議と云はなければなりません、右の次第で我々志ある者相集つて竹帛会なるものを結び幾分なりとも斯界に貢献したい存念であります、願くば右趣旨に御賛同の上、目的達成に御力添へ賜はらんことを。

昭和十年七月

発起人 桑木或雄 小出満二 西久光[工学部物理学教授] 長壽吉 春日政治 西山重和[法文学部国際法教授・図書館長・西山文庫旧蔵者] 豊田實 楠本正継 安田喜代門 林大壽 田中鉄三 松浦盛雄

「竹帛会々則

第一條 本会ハ竹帛会ト称ス

第二條 本会ハ書籍ノ研究ト愛書趣味ノ涵養並ニ普及發達ヲ図ルヲ以テ目的トス

第三條 本会ハ左ノ事業ヲ行フ

一、会員ノ集会

二、展覧

三、講演会

第四條 本会ハ事務所ヲ左記ニ置ク

九州帝国大学附属図書館内

第五條 本会ノ趣旨ニ賛同スル者ハ会員タルコトヲ得但シ会員ノ紹介ヲ置ク

第六條 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会長 一名

幹事 若干名

第七條 役員ノ任期ハ二年トス

参加者として他に田村専一郎、相浦眞三、伊東尾四郎の名前が『福岡古書組合七十五年史』に見え、全国図書祭記念大展示会の出品者とはほぼ重なっており、同展示会が竹帛会結成の契機になったことが想定される。

前間宛の葉書には、1936年4月4日の第三回と6月19日の第四回の案内が残っているが、それ以降の開催は不明。

3) 図書館員による資料収集・紹介

『九大新聞』九大図書館蔵書めぐり

1936.2.12「海国兵談初版」1935.12.16 購入

1936.3.20「吾妻鏡」1931.8.31 受入 樋口文庫

1936.5.5「徒然草」1935.11.20 購入 大野家旧蔵

1936.5.22「筑前早鑑」1935.7.5 購入

1936.6.5「易林本節用集」1936.6.20 購入

1936.6.20「祥刊要覧」1933.8.15 受入 碩水文庫

1936.9.5「黄石公素書」1936.7.6 購入

無記名なので、執筆者は恐らく図書館員。新しく受入れたばかりの貴重書をいち早く紹介。書誌学的に興味深い資料を附属図書館が積極的に収集し、かつ展示会に出品しているのもこの時期であり、図書館員が主体的に資料の収集・紹介に努めていたことを窺わせる。管見の限り、こうした図書館員の活動は九大図書館史上この時期のみ。

なお、上記「徒然草」「易林本節用集」が現在所在不明になっていることから象徴されるように、戦前期の図書館員が紹介に努めていた貴重書が、戦後になると顧みられなくなり、存在を忘れられて不明になっても気づかれないケースがしばしばある。

4) 創設期職員の転出

1939年に、小原克巳が法文学部助手に、田中鉄三が陽明文庫主事に、竹林熊彦が京都帝国大学図書館にそれぞれ転任（略年表参照）、創設期の主要な職員が図書館から一斉にいなくなる→戦前と戦後の断絶の原因

なお、小原は退官後も箱崎に在住していたため、戦後になって戦前の事でわからないことがあると、図書館に呼ばれて当時の事情を尋ねられている。

6. 関係者略伝

・松浦盛雄(1899-1988)

1925年馬出で松浦書店を創業、翌年橋口町に移転した。医史学者三木栄の勧めで和本の道を志した。福岡日日新聞社で開催された「全国図書祭記念大展覧会」では田中铁三の指導のもと展覧目録を編集、田中と奔走して「竹帛会」を結成した。野村望東尼『向陵集』を含む家蔵の郷土資料は、松浦文書として福岡市立歴史資料館（現福岡市博物館）に寄贈された。

・前間恭作(1868-1942)

朝鮮学者・書誌学者。対馬厳原出身。早くから朝鮮語を修得。慶應義塾卒業後、外務省留学生として渡韓、統監府通訳等をつとめる傍ら、朝鮮古書を収集した。著書の『朝鮮の板本』は、架蔵と九大図書館狩野文庫の朝鮮本を解説しており、松浦書店から刊行されている。その蔵書は東洋文庫や文学部朝鮮史研究室在山楼文庫等に所蔵されている。

【参考文献】

長壽吉『東西南北人』第一書房、1936

長壽吉「附属図書館開設のころ」『九州帝国大学新聞』156、1936

『父乃書齋』三省堂、1943

長壽吉「図書館開設当初の思い出」『会報』8、九州大学文学部同窓会、1965

『九州大学五十年史』学術史下巻、九州大学創立五十周年記念会、1967

河島昌扶『書肆三代一舒文堂河島書店百年史』河島書店、1977

『内田魯庵書物関係著作集』第一巻、日本書誌学大系5、青裳堂書店、1979

広庭基介「図書館史の開拓と基礎づくりに半生を捧げた人—竹林熊彦」『図書館雑誌』76(11)、1982

篠塚富士男「昭和初期の大学図書館」『大学図書館研究』36、1990

広庭基介「幻の市民公開計画—明治30年の京都帝大図書館—」『大学図書館研究』37、1991

『福岡古書組合七十五年史』福岡市古書籍商組合、2003

「竹林文庫の記録文書類、ついに公開」『同志社大学総合情報センター報』29、2005

建築史塾 Archist、九州大学文書館編『平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現況調査成果報告書』九州大学、2007

岩猿敏生「九州と三人の図書館史家—竹林熊彦、小野則秋、永末十四雄」『図書館学』93、2008

『九州大学百年の宝物』関連記事

42「西欧農学古典文庫」（長賢次）・44「日本英学筑紫文庫」（星子奈美）・46「桑木文庫」（平岡隆二）・53「萩野文庫」・54「音無文庫」（田村隆）・56「支子文庫」（田村隆）・64「碩水文庫」（柴田篤）・66「西田文庫」・67「樋口文庫」・68「廣瀬文庫」・93「箱崎キャンパスの建築」（山野善郎）